交差点

還暦迎えて耳順い、志立つ

東京大学医学部附属病院長　瀬戸 泰之（昭和52卒）

このような機会をいただき、誠にありがとうございます。2年前に還暦を迎えました。秋田高校を卒業して早44年経ったことになります。当時、秋田高校は自由な気風にあふれ、かつ文武両道で全国に名を馳せる素晴らしい学校でした（今も変わっていないと思っています）。あらためて感謝申し上げます。

さて、孔子「論語」では、「六十にして耳順う」とあり、他人の意見に素直に耳を傾けられる年代になったということです。ただ、孔子が生きたのは紀元前500年前後で現在とは平均寿命が違います。その当時の平均寿命は30―40歳くらいと考えられるので（現在、男性81歳）、換算すると、今小生は「論語」時代では30歳相当ということになります。となると「三十にして立つ」という年代に相当します。まだまだ、これからといったところでしょうか。

写真①東大病院全景。右下の黒破線内は大正14年（1925年）に完成した通称「赤レンガ」

還暦を迎え、昨年4月、東京大学医学部附属病院長を拝命いたしました。東大病院（写真①）＝以下、当院＝は、入院ベッド1200床、1日外来患者数2800人、年間手術件数11，000件、職員数4000人を超えるわが国有数の大学病院で、160年以上の歴史を有しています。大学病院のミッションは診療、教育、研究の3本柱であり、どれも怠ることは許されません。当院は、全国でもトップの臓器移植を行っております。ほか、ゲノム医療をはじめとした高度医療を行いつつ、東京都において小児医療センターや周産期医療センターなどの中核を担う機能も有しています。実に多彩な老若男女が集う空間となっています。その中で、患者さんファーストの、いかにいい診療を行えるか日々葛藤している毎日です。そのような中、昨年からNEWSWEEKが選ぶ世界のWORLDS BEST HOSPITALSに入れていただけるようになりました（写真②）。実に誇らしく、職員一同、また病院を支えてくれている患者さん含め、すべての方々に深謝しているところですし、何とか今後も維持していきたいと考えているところです。そのためにも、現場の声、患者さんやご家族からのご意見に積極的に耳を傾けています。やはり、「六十にして耳順う」といったところでしょうか。

写真②　病院長室にて。左下はNEWSWEEK誌より

今年は何と言っても新型コロナウィルス抜きにしては語れません。多くの領域で甚大な影響がでています。もちろん医療業界も例外ではありません。重症症例の多くは大学病院で治療を受けていますが、その中でも当院は、全国でも5番目に多い重症症例の診療を行っています（中等症の治療も行っています）。その治療を行いつつ、いかに臓器移植などの高度な医療を同時に行っていくか、当院でも大きな課題となりました。そのような環境下、いまだ院内感染ゼロを維持できており、これもまた誇らしいことだと感じています。やはり、ヒトこそが大切であり、知恵をだしあい、それをまとめていくことが肝要であることは間違いありません。あらためて、病院長として、「六十にして耳順い、六十にして立つ」ことこそ重要であると感じ入る次第です。

Profile

せと・やすゆき／1958年秋田市生まれ。東京大学医学部卒。医学博士。1964年東京大学第一外科入局。関東労災病院、中通総合病院、国立がんセンター中央病院、癌研有明病院などを経て、2008年東京大学医学部消化管外科教授。2019年東大病院長に就任し現在に至る。この間、外科系学会社会保険委員会連合会長補佐、日本消化器外科学会理事長、National Clinical Database代表理事を務める。